



(Story 3)

宇喜多秀家と辺田集落

慶長五年（1600）、関ヶ原の戦いに敗れた

安土桃山時代の備前岡山城主宇喜多秀家は、

現在の辺田集落へ落ち延び

平野屋敷に潜居することとなりました。

潜居滞在期間は二年三か月に及びます。

その中で、秀家は次のような句を詠んでいます。

うたた寝の 夢は牛根の 里にさえ

都忘れの 菊は咲きけり

薩摩から辺田へ

関が原の戦いの翌慶長六年（1601）六月、宇喜多秀家は戦で隣に布陣していた島津氏を頼って薩摩の山川港に着きました。しかし、島津は一步でも秀家を上陸させると匿ったということになりました。秀家が来たということを極秘にしておきたかった島津義弘は、徳川への配慮から薩摩には迎え、牛根の平野屋敷へ行くよう案内し、それを受けた秀家は、山川港から瀬戸海峡を通過して辺田の平野家によってきたとされます。

平野氏は元暦二年（1185）の壇ノ浦の戦いで源氏に敗れた平氏方の一族であり、辺田集落に落ち延び土着したのが始まりとされています。水軍であった平野氏は、操船術や造船術を持っていったことや、南方諸島との貿易で得たもの、また、地元でとれる薪や椿油や蠟の原料（ハゼの木）を島津家に献上していたため、武士の身分ではないものの名字・帯刀を許されたこの地の有力者でした。

平野家屋敷の後方は大樹が茂る山地で、鹿倉峠、鷓岳ヒメ岳に続いています。平野氏は上屋敷（本宅）を秀家の住居として提供し、平野一族は下屋敷（隠居どころを兼ねた海辺の監視所）へ移り住みました。安永八年（1779）の大噴火や大正三年（1914）の大噴火で地形がだいぶ変わったために、現在は平野家の屋敷がどれくらい規模であったのかはわかりませんが、秀家の滞在中は、全国から従者が相寄り、多いときは百数十人にも及ぶほどだったといわれています。それだけの人数が滞在できるよう、秀家は三回ほど大きな普請をして継ぎ足しており、屋敷は相当な広さだったことが推察できます。



写真右：現在、秀家の潜居跡には祠が祀られています 写真中央：潜居跡へ続く階段。山奥へと続きます
写真左：宇喜多秀家公